

## 入試形態と入学後の学修状況の関連性

石橋嘉一（横浜商科大学）、田尻慎太郎（北陸大学）、川本弥希（東京工業大学）

### 1. 本研究の目的と課題

本研究の目的は、入試形態と学修状況の関連性について検証を試行することである。本研究では、学修状況の検証に GPA (Grade Point Average) の数値を用いて、小規模私立 A 大学 2016 年度入学者 (N = 319) を事例に、当該年度の入試形態（推薦、一般、センター入試等）と GPA（4 年間 8 セメスター）を組み合わせた評価を試行した。主な結果は、センター入試利用型入試の GPA が、他の入試形態と比較して高い傾向が明らかとなった。また、AO、指定校推薦、スポーツに関連する入試形態においては、GPA が比較的低い数値で推移していたことがわかった。本研究では、小規模の私立大学が直面するであろう多様な入試形態から生じる評価の難しさ、在学中 4 年間という時空で生じる様々な要因の影響、および検証方法の課題等についても考察した。

### 2. 先行研究

入試形態と入学後の学修状況に関する研究方法は、分析対象が、国公立/私立の種別、大学規模の大小、入学選抜方法の多様性などの相違によって、多義に渡ることが分かった。また、おそらく、入試と教学データが、部署間で分散して管理されている組織文化背景や IR の実施体制の相違においても、可能となるデータ収集や分析の方法に相違が生じるであろう。

武方（2017）では、国立大学における入学選抜と学修状況の関係性について研究されていた。具体的には、4 学部計 18 学科（一部コース）ごとに、センター入試の成績と入学後各年度 GPA の関係性について、相関分析を用いて分析されていた。結果は、入試成績と GPA に正の相関関係を示す学科もあれば、負の相関関係を示す学科も少なからず見られた。また、同じ学科の中でも、入試の前期・後期日程の相違で、全く別の相関を示す例があり、したがって、入学試験と GPA の間には、一貫した相関はみられない、と結ばれていた。一方、二次的な分析としては、特定学科の GPA 下位 15% の学生を抽出して、在籍中 4 年間の成績の推移を把握していた。その結果、1 年次の成績が下位であると、その傾向が 4 年次まで継続してしまう傾向が明らかとなり、学修支援上の必要性が示唆されていた。

東京理科大学（2014）では、入試形態（一般入試 3 形態、推薦入試 3 形態、その他の入試形態 4 形態）と、卒業時の GPA の関係性が分析されていた。主な結果は、10 種類の入試形態と卒業時の GPA には、顕著な特徴は見られなかった。また、33 学科の入学試験の成績と卒業時の GPA にも顕著な関連は見られなかった。一方で、初年次 GPA と卒業時 GPA には、33 学科の平均で高い正の相関（0.92）がみられた。1 年次 GPA が卒業時 GPA に強い影響を与えることが示唆され、初年次に大学の授業に適應できた学生は、卒業まで優秀な成績を修めることができる可能性について示唆されていた。

神林（2011）では、私立 T 大学 2005 年度入学生における 5 学部計 13 学科の学年ごと

の成績を3群（上・中・下群）に分類し、入試形態ごとの分布を明らかにした。その結果、内部進学とスポーツに関連する推薦入試形態において、成績の下位層が多いことが明らかにされていた。この他には、入試形態を学力検査の有無で分類し、退学率との関係性を分析した（田尻 2017）、入試形態と入学後に履修した特定科目の成績の関係性を分析した赤木・他（2016）などがあった。

本研究では、小規模私立大学を分析対象とするため、センター入試利用受験者数は少数である。また、推薦入試受験者数が比較的多いことから、入試のペーパー試験の得点を使用することが難しい。そのため、まずは入試の得点は使用せずに、入試形態の種別と入学後の学修状況の推移の関係性を把握するために、先行研究の知見を活用することとした。

### 3. 方法

#### 3.1. 基礎統計

2016年度4月入学時点での各入試形態の人数を8群に分類して整理した。なお表1の特定高校とは、A大学と同名称であるが別法人の高校を指し、その他とは、編入等5つの小分類の入試形態が含まれる。

結果、指定校とAOの人数が、他の入試形態と比較して多いことがわかった（表1）。

表1 2016年度入試形態の概要（2016年4月時点）

No.	入試基本分類	入学人数	No.	入試基本分類	入学人数
1	AO	76	5	特定高校	27
2	一般	29	6	スポーツ（特定部活動）	33
3	センター	14	7	留学生	18
4	指定校	96	8	その他（1～7以外の5入試形態）	21
合計					314

#### 3.2. 4年間通算 GPA と GAP の推移

表1の314名の2016年度～2019年度の通算GPA、および春・秋学期GPA、8セメスター分のデータを個票で整理した。その後、（1）8種類の入試形態ごとに、4年間通算GPAを算出し、比較した。（2）8種類の入試形態ごとに、各セメスターのGPAを算出し、4年間のGPA推移の特徴を把握した。（3）武方（2017）を参考に、1年次GPA下位15%の学生を抽出した。成績下位層の4年間のGPA推移を把握して、学修支援のあり方に示唆が得られるか試行した。

### 4. 結果

#### 4.1. 入試形態と4年間通算GPAの関係

入試形態と4年間通算GPAの関係において、主な結果は、センター入試利用型入試の通算GPAの平均値がもっとも高かった（3.03）。一方で、全入試形態での4年間通算GPAは、2.09であったが、それ以下となった入試形態は、スポーツ（1.78）、その他（1.79）、AO（1.83）、特定高校（1.88）、留学生（1.92）であった（表2）（図1）。

表2 入試形態と4年間通算 GPA

入試形態	度数	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値
AO	67	1.83	1.05	1.84	0.00	3.68
一般	27	2.36	0.96	2.50	0.00	3.80
センター	12	3.03	0.55	3.17	1.71	3.77
指定校	81	2.34	0.86	2.48	0.00	3.82
特定高校	24	1.88	1.02	2.00	0.00	3.81
スポーツ	30	1.78	0.64	1.89	0.03	2.72
留学生	14	1.92	1.12	2.09	0.00	3.41
その他	16	1.79	0.85	2.04	0.00	2.84
全入試形態	271	2.09	0.96	2.15	0.00	3.82

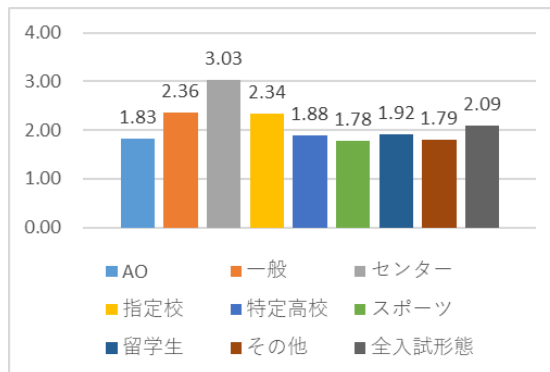


図1 入試形態と4年間通算 GPA

表3 入試形態と4年間通算 GPA (卒業生)

	度数	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値
AO	42	2.29	0.69	2.18	1.31	3.68
一般	16	2.68	0.70	2.77	1.61	3.80
センター	9	3.22	0.32	3.19	2.78	3.77
指定校	68	2.53	0.68	2.59	1.38	3.82
特定高校	15	2.45	0.68	2.22	1.59	3.81
スポーツ	24	2.03	0.35	1.99	1.50	2.72
留学生	8	2.35	0.63	2.32	1.62	3.21
その他	12	2.16	0.47	2.17	1.25	2.84
全入試形態	194	2.42	0.67	2.39	1.25	3.82

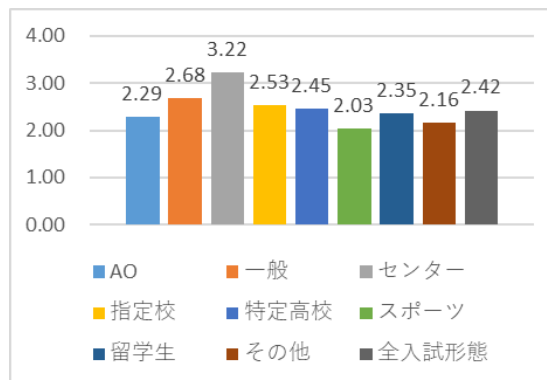


図2 入試形態と4年間通算 GPA (卒業生)

表1で示したとおり、GPAの最小値が0.00となっている事例があることがわかった。これは、退学・休学はせずに欠席が継続に至った事例や、または学費納入に関する事情など、実に様々な要因で算出されていないことがわかった。そのため、2016年度入学生において、退学、休学等その他の状態を除いた、2019年度卒業生のみでデータで、入試形態と4年間通算GPAの関係についても分析した(表3)(図2)。

結果、センター入試利用型入試の通算GPAの平均値がもっとも高かった(3.22)。全入試形態での卒業生における4年間通算GPAは、2.42であったが、それ以下となった入試形態は、スポーツ(2.03)、その他(2.16)、AO(2.29)、留学生(2.35)であった(表3)(図2)。特定高校の入試形態では、2019年度卒業生のみを焦点化した場合、GPAの平均値が0.57ともっとも上昇したことから、他の入試形態と比較して、退学等の要因が学修状況により影響している可能性が示唆された。

#### 4.2. 入試形態と4年間のGPAの推移

入試形態に基づいて、2016年度～2019年度の春・秋学期GPAの推移を把握した(表4)、(図3)。その結果、センター入試利用型の入試形態では、4年間一貫して、GPA 3.00以上に維持されていたことがわかった。一般と指定校では、中程度の成績が維持されていた一方で、AO、特定高校、スポーツ、その他では、4年間一貫して、全入試形態

表4 入試形態と GPA の推移

	2016春	2016秋	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋
AO	1.82	1.98	2.12	2.17	2.27	2.26	2.24	2.61
一般	2.35	2.50	2.53	2.48	2.42	2.56	2.65	2.78
センター	3.01	3.00	3.12	3.05	3.11	3.18	3.31	3.06
指定校	2.37	2.37	2.41	2.32	2.48	2.47	2.47	2.87
特定高校	2.04	1.86	1.96	2.09	2.32	2.24	2.37	3.07
スポーツ	1.62	1.51	1.90	2.07	2.34	2.18	1.99	2.71
留学生	1.48	1.79	2.53	2.37	2.44	2.68	2.73	3.07
その他	1.82	2.06	1.93	1.60	2.19	1.82	1.92	2.75
全入試形態	2.08	2.13	2.27	2.25	2.41	2.39	2.39	2.81

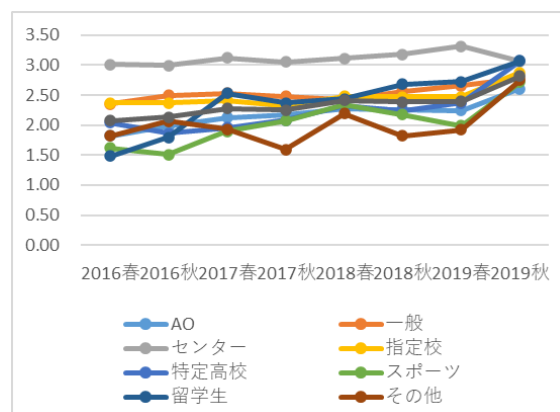


図3 入試形態と GPA の推移

表5 入試形態と GPA の推移（卒業生）

	2016春	2016秋	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋
AO	2.24	2.21	2.26	2.35	2.41	2.35	2.16	2.55
一般	2.60	2.80	2.79	2.71	2.66	2.51	2.53	2.74
センター	3.16	3.12	3.19	3.21	3.26	3.34	3.43	3.18
指定校	2.50	2.54	2.52	2.45	2.58	2.50	2.44	2.84
特定高校	2.43	2.32	2.27	2.53	2.55	2.52	2.47	3.21
スポーツ	1.80	1.72	2.06	2.16	2.37	2.18	1.99	2.71
留学生	1.76	2.34	2.39	2.25	2.36	2.68	2.66	2.96
その他	2.20	2.36	2.09	2.04	2.19	1.97	1.92	2.75
全入試形態	2.34	2.38	2.41	2.42	2.52	2.44	2.36	2.80

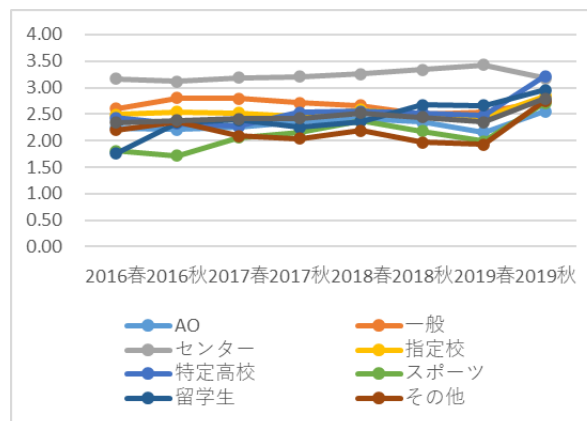


図4 入試形態と GPA の推移（卒業生）

の GPA 平均値より、低いことがわかった。また、留学生は、初年次春学期 GPA は最下位であったが、その後徐々に GPA が上昇し、4 年秋学期ではセンターと同程度になっていた。

ほとんどの入試形態で、卒業時に向けて徐々に GPA が上昇する傾向は、時系列で退学、休学等が生じていき、それらに該当する学生が、GPA の算出から除外されていく影響が考えられた。また、2019 年（4 年生）秋学期での比較的高い GPA は、既に卒業に必要とされる単位修得が終えていることと、ゼミナールや卒業論文を中心に成績が評価される背景が示唆された。

次に、2019 年度卒業生のみでのデータで、入試形態と GPA の推移を把握した（表 5）（図 4）。結果、全体的に GPA が上昇したが、特に特定高校がもっとも上昇していた。おそらく、特定高校からの入学者は、学修の中断層と継続可能な層が、他の入試形態と比べて、より顕著に二分していたのかもしれない。また、その他の入試形態では、2017 年度秋の GPA が局地的に下降していたが（図 3）、卒業生のみで GPA の推移を把握してみると、局地的な下降はみられなくなった（図 4）。その他の入試形態には、編入生等が含まれるため、2 年次秋学期に何らかの影響が生じていたのかもしれない。

表6 入試形態と成績下位層の GPA 推移

	度数	2016春	2016秋	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋
AO	8	1.25	1.25	1.73	1.68	1.92	1.69	1.28	1.78
指定校	12	1.14	1.54	1.90	1.67	1.86	1.77	1.77	2.23
スポーツ	6	1.26	1.36	1.85	2.03	1.88	2.00	1.59	1.83
留学生	4	1.01	1.65	1.83	1.78	1.74	2.10	2.19	2.67

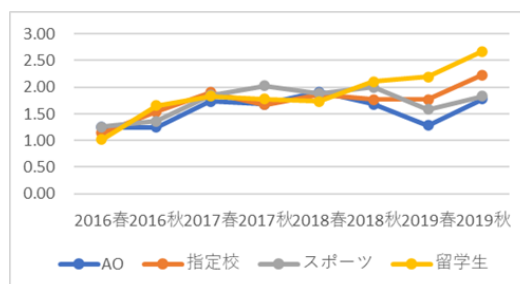


図5 入試形態と成績下位層の GPA 推移

### 4.3. 入試形態と初年次春学期 GPA 下位 15%の特徴

武方（2017）を参考に、成績下位層の初年次 GPA が、その後どのように推移するか把握した。成績下位層には、退学等の学修中断に至った学生が含まれるが、卒業までの GPA の推移を把握する目的から、学修中断層は対象から外し、卒業生のみを対象とした。また、下位 15%を抽出したところ、一般、センター、特定高校、その他では、度数が 1 となってしまったため、除外した。

結果、AO、指定校、スポーツ、留学生に、初年次 GPA 下位 15%に該当する学生が、複数いたことがわかった（表 6）。また、4 年間の GPA の推移をみると（図 5）、AO、指定校、スポーツでは、ほぼ一貫して GPA が 1 ポイント台で推移していたことがわかった。先行研究においても、成績下位層の固定化が学修上の問題として指摘されていたが、A 大学の場合においても、同様の問題が特定の入試形態における成績下位層で生じていたことが示唆された。

## 5. 考察と今後の課題

### 5.1. 分析結果の考察

本研究では、小規模私立 A 大学における 2016 年度入試を 8 群に分類し、(1) 4 年間通算 GPA、(2) 4 年間の GPA 推移、(3) 成績下位層 15%の特徴について把握した。

4 年間通算 GPA では、センター入試利用型入試の通算 GPA が 3.03 ともっとも高かった。一方で、特定高校、留学生、スポーツ、その他では、全入試形態の GPA 平均値よりも、低いことがわかった。

4 年間の GPA 推移では、センター入試利用型では、入学から卒業まで GPA3.00 以上が維持されていたことがわかった。一般と指定校では、中程度の成績が維持されたが、他方、AO、特定高校、スポーツ、その他では、4 年間一貫して全入試形態の GPA 平均値より、低い数値が継続していたことがわかった。また、留学生では、初年次春学期 GPA が、最下位ではあったが、その後 GPA が上昇していった。

留学生の GPA 推移の特徴について、A 大学 IR 委員、教務課で議論した結果、留学生は在学と日本在留資格を継続するためには、一定水準の成績を維持しなければならない外的要因の存在が明らかとなった。そのため、日本留学後の日本語能力の向上、日本語授業への慣れなどの内的要因と、在学・在留資格の要件を満たさなければならない外的要因がともなって、GPA が向上する背景がうかがえた。

成績下位 15%の抽出では、AO、指定校、スポーツ、留学生に複数該当することがわ

かり、特に、AO、指定校、スポーツでは、卒業まで一貫して GPA が低い傾向がわかった。今後、他の年度の分析においても、同様の傾向がみられるようであれば、特定の入試形態における成績下位層を早期に抽出することで、学修支援を早期化し、サポート体制を充実化できる可能性があるかもしれない。

## 5.2. 今後の課題

今後の研究上の課題と発展性では、成績下位のみでなく、上・中・下位の3観点で把握することで、より詳細に入試形態と成績の関連性を把握できるだろう（神林 2011）。

学修状況を卒業時の国家試験合格で判断する研究事例もある（橋本 2018）。学部の特性によっては、GPA の推移よりも、入試形態と卒業時での資格試験合格率で判断した方が、教育的なフィードバックがよりエンパワーメントされるだろう。本研究対象のA大学の場合は、税理士試験、簿記検定などの合格率をみることになるだろう。

また、A大学において今後2017年度以降入試の評価を行う場合の課題は、平成31年度以降の入学定員の厳格化（文部科学省 2016）の影響について、どのように考察するかである。本研究対象の2016年度入試の倍率は1倍弱であったが、その後徐々に倍率が上がり、2020年度では約5倍へと上昇している。学生の質が4年前とは一転してしまった可能性が高いため、学修状況もだいぶ変わっていることが想定される。今後、経年で教育の成果を学修状況の推移でみる場合は、このような外的要因の位置づけが研究上の課題となることが予見される。

## 【参考文献】

- [1] 赤木充宏, 日比野至, 肥田朋子, 平野孝行 (2011) 名古屋学院大学人間健康学部リハビリテーション学科における学業成績の調査: 入試区分の違いによる検討, 名古屋学院大学論集人文・自然科学篇, 47(2): 73-81
- [2] 橋本佳子 (2019) 医学部入学者選抜はどうあるべきか?! 医学教育学会大会シンポ, ニュース医療維新, <https://www.m3.com/news/iryoishin/690807> (参照日 2020年8月25日)
- [3] 池田文人 (2009) 入試区分による入学後の学業成績の優劣の検証, 大学入試研究ジャーナル, 19: 95-99
- [4] 神林博史 (2011) 入試方法と学業成績: 東北学院大学2009年度卒業生データの分析, 東北学院大学教育研究所報告集, 11: 33-41
- [5] 文部科学省 (2016) 平成31年度以降の定員管理に係る私立大学等経常費補助金の取扱について (通知), [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/19/1409177.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/_icsFiles/afieldfile/2018/09/19/1409177.pdf) (参照日 2020年9月7日)
- [6] 武方壮一 (2017) 入試成績と GPA の相関についての解析, 教育・学生支援センター紀要 1: 1-16
- [7] 田尻慎太郎 (2017) AO 入試に学力検査は必要か: 入試方法と退学率の分析から, 大学情報・機関情報研究会研究集会 2017 論文集, 66-71
- [8] 東京理科大学 (2016) GPA による成績評価に影響を及ぼす要因について解析, 平成26年度東京理科大学総合教育機構教育開発センター活動報告書, [https://www.tus.ac.jp/fd/wp-content/uploads/2019/11/fd\\_report2014.pdf](https://www.tus.ac.jp/fd/wp-content/uploads/2019/11/fd_report2014.pdf) (参照日 2020年9月5日)